



TITLE:

明初の北邊について

AUTHOR(S):

萩原, 淳平

---

CITATION:

萩原, 淳平. 明初の北邊について. 東洋史研究 1960, 19(2): 141-173

ISSUE DATE:

1960-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148182>

RIGHT:

# 明初の北邊について

萩 原 淳 平

まえがき

一、元朝のモンゴリア復歸について

二、明朝治下の蒙古人

三、「靖難の變」と蒙古人

むすび

ま え が き

明朝は、蒙古民族のたてた元朝を打ち倒し彼らを北方に驅逐して、漢民族王朝を復活したことをもつて、その最も著しい特徴とされている。そして、この點については明初に勝利を収めた漢人側の學者が多くの史料を残してくれたし、そのごも明代を通じて漢民族は北方民族から苦しめられることが多かったため、かえつて民族意識が昂揚したこともあつて詳しく記されている。

これに反して、蒙古民族自體に關する諸事實は必ずしも充分に書き残されているとは云えない。しかも明朝の後の清朝は禁書などを行つた程で、蒙古民族に關する研究も制限していた。このため從來明初の蒙古民族に關しては、我國でも和田博士の研究を中心としてすぐれたものが多く發表されているにもかかわらず、これらは漢民族の立場に重點を置いたものが多いように思われる。しかし、このような異民族王朝の交替は甚だ微妙なものであつて、漢民族を中心とした立場からの研究だけでは充分でない。

さいわい明實錄などに示された斷片的な史料を検討してみると、蒙古人がモンゴリアへ復歸する過程とか、復歸に失敗して再び中國に流入し、中國とくに華北の地においてかえつて重要な役割を果たしたことを部分的ながらうかがうことが出来る。そして、これらの内容は互に切り離して取

扱うべきではないと思われる。そこで本稿では、従来の研究を再検討しながら出来るだけ蒙古人を中心として長城の南北にわたる彼らの活躍を総合的に研究してみた。こうした意味から表題でも漠然と北邊としておいた。また明初と云えば、少くとも永樂までを入れるべきであるが、ここでは「靖難の變」までをもつて一區分とするのが便利なため、永樂については次ぎの機會にゆづつて、洪武期に限っておいた。

# 一、元朝のモンゴリア復歸について

北伐の明將徐達の軍が通州をおとし入れたのは洪武元年（一三六八）七月二十七日のことである。都に近い重要な據點を占領されたしらせを受けて元主順帝は、いよいよ危険の身に迫るのを知つておそれをなし、まず皇妃・太子らを集めて戦亂を避け北行することを議した。つづいて明の方、端明殿においても群臣を召して會議を開いた。このときには、左丞相の失烈門ら一部の人々が京城固守を主張したが、大勢のおもむくところ、遂に北徙が決定された。そして後事は淮王帖木兒不花にたくし、丞相慶童を留守とし

て京城防備にあたらせることにして、この夜、元主および后妃・太子らは建徳門を開かせて、居庸關より北におちのびて上都へと向かった。

これをもつて元朝は事實上、北京をあけわたし再び回復することは出来なかつたのであつて、約百年にわたる元朝の中國における支配權がここに終つたのである。北徙については、王朝末期の例として悲痛な場面もあつたであろうが、中國歴代王朝と比較すれば、その幕切れはそれほど悲劇的なものではなかつたと想像される。それと云うのも、やはり蒙古人<sup>①</sup>には原住地モンゴリアと云う逃れる先があつたからである。こうして元朝は、これからのち長城以北に根據を置くことになつたのである。

つぎに、まず元朝の北徙後の行動をたどつて見よう。洪武元年七月北京を後にして上都へ向つた順帝は、一年ばかり上都に滞在していた。これに對して明の太祖は洪武二年六月に、常遇春に命じて北方に遠征させることにし、李文忠を遇春の輔佐に任じた。そして常遇春・李文忠は、歩卒八萬・騎士一萬をひきいて北京から上都開平へと向つた。彼らはまず故元の將である江文清らの兵を錦川に破り、つ

ずいて丞相也速の軍をも破つて開平にせまつた。そこで順帝は、北に向い應昌に逃れ、三年四月に病氣にかかつて、この應昌で死んだ。たまたま明軍はその虚に乗じて進撃し、翌月應昌を陥れた。そして皇孫の質的里八剌以下多數が明軍の俘獲となり、嗣主の昭宗愛猷識理達臘のみ、わずかに數十騎を以て、今の巴林の慶州方面に逃れたと云われる。

さて、これら元朝のモンゴリア復歸當初の事件について、これまでの研究の主なものとして和田博士の説をあげることが出来る。博士は、まず元史順帝本紀の至正二年に宗室陽翟王阿魯輝帖木兒が漠北に起つて背後から元都に迫り、使を遣して、順帝を責め、「祖宗以天下付汝、汝已失大半、若以國璽付我、我當自爲之」と云つた事件をひき、陽翟王は太宗窩闊台の第七子滅里大王の子孫であり、これは太宗後王の元朝に對する反抗である。そして順帝が困難と危険を冒してまで敢て明邊を遠く離れなかつたのは、一には中原恢復の希望を棄てかねたからでもあろうが、一には専ら西北蒙古に残る別勢力を憚つたからでなければならぬ、と結論づけておられる。なるほど元朝崩壞以前モンゴリアに反抗の勢力が存在していたであろうことも豫測され

るので、この論據を無視出来ないことは云うまでもない。

事實元代には三十餘年にわたる海都の叛亂が発生しており、モンゴリアに反元朝勢力が存在していたことを明らかにしている。しかし和田博士は別の論文で、元代モンゴリアについては、元朝が封禁制を布いて、内容を明らかにしなかつたために詳しいことは知り得ない、とも述べておられる。しかも阿魯輝帖木兒の事件は、順帝の北徙をさかのぼること十年、そのうえ、この事件は、衰弱しつつあつた元朝の軍事力でも鎮壓することが出来たものである。したがつてこの事件だけで西北蒙古の別勢力を強大なものとなし、順帝北徙の性格を勢力關係によつて結論づけることは甚だ危険であると思われる。むしろその後の北への行動から見れば、必ずしも當を得たものとも思われない。

すなわち明實錄によれば、順帝死去直前の洪武三年四月丙寅には、

王保保僅與其妻子數人、從古城北遁去至黃河、得流木以渡、遂由寧夏奔和林。

とあり、元將王保保（擴廓帖木兒）らが沈兒峪口で敗れてのちわずか數人で和林に逃がれている。ついで順帝死去直

後の三年十二月癸亥には、

遣使致書元太子、并招諭和林諸部。

とある。この史料では元の太子すなわち愛猷識理達臘が和林に逃れていたとは云いえないにしても、「ならびに」とある事から見れば、ほぼ近い所に居つたと推測され、しかも同じ明朝の使者が支障なく派遣されたのは、元主と和林諸部が争つていないことを意味するものであろう。また五年正月庚午には、明將徐達の言として、

王保保今復遁居和林、臣願鼓率將士、以勦絶之。

とあり、三年十二月數人とともに逃れた王保保が五年正月には明軍遠征の重要な対象とまで強力化していることを知るのであつて、僅一年足らずの間にこれ程大きくなつたのは、むしろ、和林方面に元朝支持勢力のあつた證據ではなからうか。これに對して明朝は同じ五年正月に十五萬の兵を以て、三道に分れて北征する計畫を立てたのであるが、その目標は和林にあつた。そして實際にこの遠征では、李文忠にひきいられた一部の軍隊が、居庸關を出て、開平・應昌をすぎ、ケルレン河畔に達し、更に西方のトウ河からオルコン河の流域にまで達している。これから見ると北

元の殘存勢力はすでにモンゴリア奥深くまで達している。また同じ遠征で大將軍徐達にひきいられた本軍は嶺北に至り、北元の軍に敗れて、「兵を斂めて塞を守る」有様で、北元の軍の一部は邊境近くにも存在しており、モンゴリア内で、北元に反抗する勢力の活躍を知ることが出来ない。

これらは、順帝の北徙後わずか二・三年のことにすぎないので、順帝が上都開平や應昌に逃れたころでも、反抗勢力が存在し、それが順帝らの北上を阻止する原因になつたとは思われない。

また和田博士は、順帝が開平・應昌に止つた理由として、中原恢復の希望をあげておられる。これは地理的な意味で妥當な解釋と思われる。そして北徙した元軍のなかにも明軍に抵抗して、明邊で元朝の回復をはかつていると思われるものもある。とくに洪武五年の明軍の北方遠征にあつては、さきにもふれたように中路を進んだ徐達の軍が長城附近で強い反撃を受け退却したのである。

しかるに一方においては、これと全く對照的に洪武三年二月戊子の、

是月左副將軍李文忠率師至興和、元守將舉城降。

とか、三年五月辛丑の、

左副將軍李文忠至應昌、遂圍其城克之。

とか、五年六月戊寅の、

征西將軍馮勝進至亦集乃路、元守將卜顏帖木兒全城降。

などに見られるように、集團で殆んど無抵抗のまま降服しているものもある。とくに應昌の場合は、逃げのびた愛猷識理達臘以下數十騎は別として、嫡孫の買的里八剌をはじめ皇妃・宮人および諸王・省院達官士卒らが全部捕獲された。このなかには皇妃・宮人らのような非戦員や、蒙古人ほど反明鬭争意識の強くない元朝の漢人軍も含まれていたことであろう。しかし、それにしても應昌におけるような北徙後の中心勢力のなかには、かつての蒙古人の重要人物も数多く含まれていたであろうことは疑いない。彼らが何ら抵抗することもせず、また難を避けることもせず降服していることは中原恢復のための努力をしていなかったと云つても過言ではなからう。それよりも注目すべきことは、彼らが遊牧生活を好まず集團的に城廓に根據して定着的な生活を送らうとしていることである。

がんならい遊牧地帯にあつては、末子相續が社會の慣習と

なるほど、分散して遊牧することが強要されるものである。従つて、彼らが簡單に遊牧生活に還元出来るのであれば、出来るだけ早く分散すべきである。これに對して元朝の回復を計るためには、まず團結が必要であると云う反論も出よう。しかし、北方民族が結集するのは、戦争の直前しかも戦鬭員のための結集であつて、城廓で集團生活を送ると云うことは、そのこと自體で間接的には戦鬭力を弱める結果になる。<sup>④</sup>まして明軍の北進を豫期するならば、遊牧地帯での戦鬭は、騎馬による機動力を生かすのが最も好ましいのであつて、これによつて戦鬭し易い地點に敵を誘導して勝を収めるか、敗戦の場合でも分散逃避することによつて、被害を最小に止めることが出来るのである。従つて、さきに述べた城廓によつて集團居住し、しかも抵抗することなく降服したことは、むしろ元朝回復への努力を怠つたことを意味する。なかでも卜顏帖木兒の場合は洪武五年まで城廓生活を送つていたわけで、彼らの降服の最も主な原因は明軍に敗れたのではなく、遊牧社會への還元に敗れたことにあるだろうと推測される。

このような觀點から、その一例として順帝についての吉

川幸次郎博士の研究の一部を紹介しておこう。

順帝は明宗の子であるが、幼いころは廣東の靜江(桂林)で育ち、文宗死後むかえられて即位した。時に年十三才、靜江に居た頃は寺に居住していたが、その長老が彼に論語や孝經を教え、かつ日課として二枚ずつ習字をさせたと傳えられている。こうして幼い頃にはほぼ漢人の子供と同じ教育を受けていたようである。そして君主として都にむかえられた時にも書冊紙筆を持つて行つたとも記されている。さらに帝位についてからは、陶宗儀が「書史會要」で「天性仁恕、つとめて寛平もて治を致したまい、奎章を改めて宣文と爲し、儒を崇めて道を重んじ、舊臣を尊禮したまう。萬幾の餘には、心を翰墨に留めたまい、書したまう所の大字は、嚴正結密にして、淺學の到る可きに非ず。奎畫の世に傳わるもの、人知りて實となす。」

と云つてゐる。順帝が所謂モンゴルのな尚武剛健な君主でなく、中國的教養を身につけた君主である一面がうかがえる。この宣文閣に順帝は五日ごとに御し、歐陽玄・李好文・黃潛・許有壬らの學者から四書五經の講義を受け、手習をし、古琴を弾じたりしてたのしみにした。或はここで宋の徽宗皇帝の畫を賞したばかりでなく、みずからも畫を

畫いたと傳えられている。

こうして至正の末年ともなれば、天下は大いに亂れ、元の運命は風前の燈の如くであつたにもかかわらず、順帝は少しもこれをうれえず、龍舟を造つて内苑に浮べ日々宴樂にふけつて國事を顧みなかつた、と言われる。

明實錄洪武三年六月丁丑の「平定沙漠詔」の中にも「庚申之君(順帝)は荒淫昏弱にして紀綱大いに敗る」とあるが必ずしも誇張ではなからう。これらを見ると、同じモンゴル人とは云いながら、昔日のおもかげは全く失われ、漠北の帳殿を轉々とする北方の君長を想像することは出来なく、ただ漢文化ないし定着生活の渦まく中に住む中國の一君主にすぎないことが知られる。順帝が上都に逃れたのは、中國統治三十五年後、五十才にならうとする時であつて見れば、恐らく應昌まで逃げのびるのが精一杯で、モンゴリアに復歸して遊牧生活に還元することは困難であつたろう。このような事情はただに順帝のみに限らず、順帝とともに北に逃れた人々の多くにも、程度の差こそあれ、あてはまり得ることではなからうか。彼らは直接農耕にたずさわつていなかつたであらうが、政治家として或は軍人と

して活躍したとしてもやはり中國に基盤をおく限り、遊牧への還元を困難にする要因が存在していたと推測される。

こうして彼らの降服は、その原因としては複雑なものがあろうけれども、明軍の軍事力に敗れたからと云うようなものではなく、むしろ主とし遊牧への轉化失敗と云う自己崩壊によるものであると考えられる。この傾向は「擧城降」のような明白な形をとらないとしても、洪武時代の蒙古人にはかなり多く見られる。

とくに洪武時代は三年をはじめしばしば長城をこえて明軍が進出して大きな成果を収めてきたが、實際に戦闘を交えた形跡は意外に少くかえつて無抵抗で降服する者が多かった。ただこの降服にも規模の大小をはじめ、降服のしかた、すなわちその性格に色々の相違がある。實録を見るとその性格によつて各々表現が異つてくる。しかもその表現がさきに述べた自己崩壊の内容と關聯すると思われるので、洪武時代の蒙古人について明軍の成果の面から考察を始めてみよう。

まず成果のうち最も多くあらわれてくるのは、ただ單に「獲」とか「俘獲」などと記されるものである。これは「擒

獲」とか「生擒」とは異なるものと思われる。擒獲は、「斬首」「斬獲」などと共に出てくるもので戦闘を交え、武力的抵抗を示した者について用いられている。このような状態の捕虜は本來反抗意識の強いもので、とらえられたのち殺されることが多い。私がさきに明初の遠征には戦闘を交えたことが少ないと述べたのも、この擒獲とか斬首の記載が、實録に少ないことから推測したものである。これに反して俘獲は敵が目前にせまつてきたような時、すなわち受動的ではあるが、普通には戦闘を交えないで降服する者をさす。その性格から云えば自發的降服を意味する場合に用いられている。これらはある意味では遊牧轉化失敗者に入り得ると思われる。

次に、同じ自發的降服でも一層積極的な形式を取つた一群がある。例えば、

洪武三年五月辛丑（前引の後文）

（李文忠）師過興州、遇元將江文精等率軍民三萬七千九百人來降。とか、五年六月己丑、

振武衛指揮僉事王常先等招集紅羅山故元將阿速所部軍士七千人來降。

などのように、明軍からの危険を直接に受けていないにも



かわからず、みずから進んで降服している。そのうえ、三萬とか七千もの集團投降は、恐らく長城以北の地で限られた城郭地點にすら根據出來なかつた一群が遊牧への轉化困難から投降したものであろう。この「來降」は、勿論自發的に明軍に降つたものであるが、ただ明軍が長城以北に軍を進めて來たときとか、何らかの形で投降を働きかけてきた機會をとらえて來降したものである。

次に示すものは、同じ「來降」でも更に積極的な性格をもつものである。すなわち、

纔韃五千九百餘人自東勝來降。(五年十月)

故元廣平王保咱自大同來降。(八年五月)

などで、これらは明軍の北進を受けることもなく、自ら長城を越えて定着地帯へ入つて投降したものである。

またこのほかに、

故元右丞周亨等率兵民、自沙漠來歸。(十二年七月)

故元將校火里火眞、自沙漠來歸。(十四年七月)

のように、「來歸」するものもかなりあつた。この「來歸」と云うのも自發的意志にもとづいて積極的に明の版圖内に入つてくるものをさす。ただこの來降と來歸を區別して用

いるのは主として受ける立場にある明側の解釋にもとづくと思われる。すなわち、「來降」とは明側と戰爭状態にある敵側の投降者、「來歸」は一應戰爭状態にない歸順者としてよからう。しかし北元の立場からすれば、例えば故元廣平王保咱等自大同來降のように、明軍が遠征のために派遣されているわけでもなく、大同まで來て投降したので、「來歸」の場合と實質的には變らない。強いて云えば、その後の明朝の待遇に差異が生ずるかも知れないと云う疑があるに過ぎない。私はこれらの「來降」「來歸」の主な原因も定着から遊牧への轉化困難に起因するのではなからうかと推測するのである。もつとも來歸來降は明初に限つたわけではなく、中期末期にも實錄にしばしばあらわれてくる。これには、例えば、使者としてたび／＼中國に來たことのある者が、そのまま中國で生活を送りたいと云つて希望するもの、或はモンゴリア内が分裂して、鬭爭の結果敗れて住む場所を失つてやむをえず來歸を希望するものなどそれぞれの場合に應じて多くの要因を持つてゐる。洪武年代の來降・來歸にもこの傾向が全々認められないわけではないが、當時のモンゴリアの狀態から判斷すれば、むしろ復歸

後の遊牧への轉化の困難さが主なものであらうと考えられる。ただし俘虜とか來降・來歸が遊牧への轉化失敗に起因すると云つても、今までの所では多少漠然としていて明確な規準と云うものがない。従つてこれまでのものは必ずしも轉化失敗に起因するとも云い切れない。しかし轉化の總合的規準として「轉化に要する期間」を設定出来れば一應解決のいとぐちになると思う。すなわち、その期間内自發的に中國に降つて來たものは、これを轉化失敗者とみなすわけである。この意味で轉化期間について述べて見よう。

まずこれを東アジアの歴史に照して見れば、本來、北方遊牧民族がしばしば中國に侵入し、實際に農耕に従事したものは少ないにしても、農耕社會を理解し、定着化している例は多い。げんに元朝も征服王朝と云われ中國支配を百年續けている。しかし彼らが侵入して來た時、「臣がつらつら考えまするに漢人と云う輩は有害無益の者であります。よろしくこの輩を殺すか、或は悉く追ひ拂つて、その土地を空にし、牧地として使いますれば多くの畜類は慈恵し得まして便宜でありましょう」と云う有名なモンゴル人別迭の言葉を引用するまでもなくその轉化は容易なもので

はない。中國に侵入し、支配に成功した北方各種族は、必ずまずこの轉化に多くの歲月と努力を費さなければならなかつた。この遊牧から定着への轉化についてはこれまでに多少研究もされている。しかるに定着から遊牧へとか、元朝のように遊牧から定着さらに遊牧へと云う、ケースは史上元朝の場合を除いて殆んど見ることは出来ないし研究も殆んど行なわれていない。もつとも農耕定着していた中國人が長城以北へ侵出したことはしばしば見られるが、これは所謂接壤地帯と云われる農耕可能地で農耕生活を營むものが殆んどであり、これについては曾て私も論及しておいた<sup>⑥</sup>。しかしこの場合は地域が甚しく限定されており、生活の轉化と云う意味はない。それゆゑ定着から遊牧への轉化期間のような問題は、從來の研究によつては手掛りが得られない。しかし衣食住の變化はもとより社會習慣とか思考形態に至るまで改めるとなると相當長い年月を要すると見なければならぬ。また適應性と云う個人差による例外的なものも多くあらうし、簡単に年限を設定することは困難である。そして元朝の場合は、本來遊牧民族であつたこと、さらにその効果については甚だ疑問であるが、一應蒙古至

上主義にもとづいて、遊牧的性格を保持することに努めたなどの条件もあり、甚だ複雑と云わなければならない。

しかし、これに對して明人はその期間を凡そ十年間と考えたようである。すなわち洪武十一年六月壬子の禮部の臣の言として、

彼（愛猷識理達臘）久離中華、漸變異俗。<sup>⑨</sup>

とある。これについて、勿論異論も生ずるであろうが、私としては、試案として、この「十年」を一應轉化期間の規準にして見たいと思う。

つぎにこの規準をもとにして、その間の來降・來歸や捕獲はどの位のものであるか、頻度とか實數を知る必要がある。勿論正確な數字は知りえないが、一例として、實錄より洪武四年・五年の來降のみの例を擧げて見ると、

洪武四年

正月	故元樞密都運帖木兒等自東勝州來降
三月	故元院判劉原利等降
五月	故元宣慰司僉事范自野自察罕腦兒來降
七月	故元平章魁斤等率其部族自東勝塔灘之地來降
九月	故元詹事院副使南木哥詹事丞朶兒只等來降
九月	故元宗王子巴都麻失里沙加失里等來降

十二月

故元宣政院副使常繼祖等自河州來降

洪武五年

正月	故元知樞密院伯顏赤斤帖木兒等來降
三月	故元樞密同知別哥禿來降
四月	故元趙王汪古圖左丞錢友德來降
六月	故元將上都盧降
十月	故元將阿速所部軍士來降
十月	韃靼自東勝來降

となり、來降だけで年に六・七件にのぼっている。

次ぎに來降・來歸捕獲の總數を明實錄よつてしらべると、約二十萬となる。但しこれは數が明示されているものだけであり、その外に「……等來降」とだけあつて數字をあげてないものが多い。特に「歸附者甚衆」とか「全城降」の如きは、それだけで數萬を數えるであらう。そのなかには元朝に従つて北徙した漢人の官僚・軍人<sup>⑩</sup>や、彼らおよび蒙古人に従つた部曲の類が多く含まれているとしてもかなり多數にのぼることは疑いない。

これに對してモンゴリアに残つて還元ないし轉化しえたと思われるものは、どの位の數にのぼるであらうか。これ

については、實錄に、

洪武四年正月壬寅 孤處沙塞步騎不滿數萬。

(洪武五年正月庚午 北虜歸附者相繼)

洪武七年九月丁丑 今之衆壯弱不過二萬、君以萬騎或七八千騎

欲與中國相抗。

とある。四年の場合は故元臣秃魯に賜つた勅諭の一文であり、七年は愛猷識理達臘に與えた勅書である。従つていずれも太祖の言葉であるから、どれ程信賴出來る數かは疑問である。しかし、當時は明軍がモンゴリアに侵出しており、又モンゴリアからの來降者も多い。そのうえ、明朝としてもモンゴリアの狀勢には特に注意を拂つておつたことであるから、それ程誇張はないと思われる。とくに七年の勅書はモンゴリアの中心人物である愛猷識理達臘にあたえたものであり一應信用してよからう。こうして見ると、洪武三年の明軍の北進で來降した者は少く、見ても十萬、その結果四年にはモンゴリアに残つたものが戰鬪員だけで數萬、非戰鬪員を加えれば、まだ十數萬居つたことになる。その後五年までに歸附の者相繼ぎ、さらに五年の大遠征の結果、來降者は相當數にのぼつたが、その結果、七年には、わずかに戰鬪員、一萬未滿、非戰鬪員を含めて二萬に激減した

わけである。七年と云えば、私の試案によれば、まだ遊牧轉化の限界點である洪武十一年まで達しない移行期で、しかもその半ばを僅にこえたにすぎない。この頃すでに北歸當初の一割にもみたないまでに減少しているのである。しかもそのなかには、元朝北歸以前からモンゴリアで遊牧していたものも含まれている可能性がある。したがつて、元朝の遊牧轉化者は更に減少する。こうして見ると、元朝のモンゴリア復歸は、轉化期間内に、ほぼ失敗し終つたと見て差支えなからう。和田博士はこの間の事情を、「洪武五年の大遠征で中央軍が敗れた所から、元軍の威勢が寧ろ強く、明軍はその連戰連勝の出鼻を挫かれたので、是より明軍は方針を變じ、敢て長驅して蒙古に入らず寸進尺取して邊境を固め……」と述べておられ、すべて戰鬪を以て兩者の關係を考えておられる。なるほど、元軍も個々の戰鬪力は強い。しかし、この頃すでにモンゴリアには明朝の成立に直接危険を與えるような勢力は殆んどなくなつてしまつた。これまでの經驗から見ても、敢て積極的に出ればかえつて抵抗も受けるが、彼らの自己崩壞をまてば、自らモンゴリアの危険は無くなる。従つて、ただ彼らの來降來歸を受け

入れればよいわけである。こうして明朝はこの後しばらくはモンゴリアに積極的に出軍しなかつたと解した方が妥當であろうと思われる。

もつとも北元勢力の中國侵入事件もないではない。むしろ洪武六・七年頃には、しばしば侵入事件が報ぜられている。しかし、この侵入に對して明朝は、居民を内地に徙すと云う消極策を取っている。例えば六年十月の如きは、

山西弘州蔚州定安武朔天城白登東勝豐州雲内等州縣の八千二百三十八戸、計三萬九千三百四十九人を、中立府に徙している。そしてこの理由として胡虜の寇掠をあげている。これは、北元の勢力が明軍との正面衝突を望まず、専ら民戸の掠奪に向いていたことを示すものであるが、このことは北元の人々の中國社會への經濟的依存度を示すものと見てよからう。必ずしも遊牧への轉化とまでは行かなくとも、事實なかには來降後も邊境で牧畜生活を送っているものもあるが、衣食にわたつてはこれまで中國社會に依存していたのであり、その補給のめちが絶れたための掠奪侵入である。明朝のこの徙民政策だけで來降するものも増加したのではなからうか。そしてこれらは、むしろ中國社會

内の群盜と解釋すべきで、元朝の回復をはかると云うような政治的意圖にもとづく戰闘とは云いえない。

こうしてモンゴリアに復歸した蒙古人は洪武十一年ころまでに殆んど再び中國に流入してしまつた。しかし元朝崩壞當時蒙古人が逃れたのはモンゴリアばかりでなく、もつとはるかに幅の廣いものであつた。それらの中で最も重要なのはマンデユリアである。

御承知のようにマンデユリアには元代に蒙古人が配置されており、元朝崩壞にあたつても、ここに逃れたものも少くない。まずモンゴリアの例に従つて實錄の中から「來降」「來歸」の頻度をしらべて見ると、マンデユリアにあつては、洪武十年以前に、自發的來降來歸したものは意外に少く、十一年五月に故元權樞密副使の史家奴等四十一人が遼東より來降したのを始めとし、十五年の七件をピークとして十四・十五・十六・十七年に集中されている。平均してモンゴリアと大分遅れているわけである。ただし來降來歸の事情はモンゴリアの場合とは、大きな相違があると思われる。それは、マンデユリアは農耕可能地も多く、また遊牧と云つても固定式住居にもとづく半遊牧的なものであ

る。北歸したものは一應選擇權もあるので、定着・遊牧關係からは結論をうることは出来ない。むしろ經濟的依存關係を斷ち切られたための來降來歸が主なものと解される。

しかしながらその數から云うと、例外とも云うべき二十一年に降つた納哈出の勢力が壓制的に多い。納哈出は一時、モンゴリアをも含めて、北方民族の主導權を握つていたと思われるし、納哈出の來降が明朝と北方との關係にある點では一時期を劃したと思われるので、和田博士の研究とかさなる所もあるが、いささか詳しく觸れて見よう。

納哈出は蒙古帝國の功臣木華黎の遠孫で、木華黎がチンギス・ハーンから左翼の萬戶すなわち興安嶺方面の鎮撫に充てられてから父祖相繼いで遼東地方の支配にあたつていたと云われる。しかし元末には江南の太平路におつたように、至正十五年六月には常遇春に攻められて捕虜になつた。しかし、北に歸りたいと希望し、十二月に望みかなつて北歸した。その後、至正二十二年には瀋陽に根據し、行省丞相として高麗の東北面に入寇したりして、混亂していたマンヂュリアに着々と勢力を築いたようである。洪武元年には太尉に任ぜられ元朝のマンヂュリアにおける最も有力

な指導者となつた。明朝でもその動勢に注目し、しばしば招撫のために使者を派遣した。しかし納哈出はこれに従わないで、かえつて、しばしば南下して掠奪をほしきままにした。例えば、洪武五年十一月の如きは、牛家莊を劫掠し、食糧十萬餘石を焼く有様であつた。しかし、彼は數多くの兵力を保有しているにもかかわらず、その内部は必ずしも統一していたわけではなく、元朝を復活するために反明體制をととのえるまでには行かなかつたようである。このような状態を見ぬいて明朝は洪武二十年正月を期して、一方では軍隊を派遣し、一方では招撫の使者を派遣すると云つた硬軟兩面から納哈出にせまつた。軍の方は馮勝が征虜大將軍に任命され二十萬の兵をひきいて北方に向つた。このうち五萬をさいて、大寧を守らせ、本軍は金山へと向つた。六月明軍がいよくせまると、まだ戦いを交えないうちに、まず半ば自發的に故元將の洪伯顔帖木兒らが其の部落をひきいて來降、つづいて、全國公觀童も來降、納哈出も豫め使者を派遣しておいて、數百騎をひきいて、自ら右副將軍藍玉の營に至つて降服した。このときの様子は實錄によれば、

遂率數百騎、自詣玉約降、玉大喜出酒與之、飲甚歡、納哈出因酌酒酬玉。

とある。この納哈出の降服につづいて、來降者が急激に増し、合計俘獲二十餘萬、輜重百餘里にわたると云われる。こうして明朝はマンヂュリアの大勢力を吸収することが出来た。マンヂュリアの納哈出が降ると、北方における殘存勢力の主なものゝ脱古思帖木兒のみになつたが、彼の配下の人々も混亂しはじめたようである。二十一年三月壬午の藍玉に與えた勅諭の中にも、

ちかごろ故元の司徒阿速らが來降してきた。朕はその事情を察するに、虜心惶惑して衆に紀律なきを知る。その勢をはかるに持久するあたわざらん。

とある。すでに彼らが自己崩壊しつつあるところを逃さず、太祖は藍玉に北進せしめたのである。藍玉は大寧から慶州を通じて北進したが、當時脱古思帖木兒の軍は捕魚兒海に根據していた。脱古思帖木兒はこれよりさき二十年五月にも黒山魚海の間に水草を逐つていたことが認められている。黒山は興安嶺の異名であり、魚海は捕魚兒海すなわち今の貝爾泊の略稱であつて、納哈出のかつての根據地に近い東北モンゴリアまたは西北マンヂュリアの地にいたの

である。「水草を逐つて」と云うところから見ると遊牧生活を送つていたように思われるが、二十一年三月壬午の記事によれば、「直抵虜廷、覆其巢穴。」とある。巢穴と云う場合は納哈出の金山とか後のオールドスの場合のように、多くは根據地があつて本質的には定着している場合をさす。

しかも彼らの勢力は二十一年には十萬と云われるが、十萬が集團で遊牧することは困難であり、恐らく納哈出勢力の一部が明軍に降服せずに流れ込んで來て混亂をまねいたものであらう。藍玉の軍は四月に脱古思帖木兒の本軍にせまつた。このときには太尉蠻子らの抵抗にあつて戰鬪を交えたが、結局脱古思帖木兒と太子天保奴ら數十騎が逃れ、次子地保奴以下十萬以上が捕えられた。考えて見ると、洪武期の北方遠征のほとんどが、この自己崩壊の機會をたくみにとらえた出軍であつて、まさに捕虜收拾と云うべく、「女眞萬にみてば敵しがたし」とか、かつての又はこれ以後のモンゴル族の活躍と比すべくもない。明初の收獲は明軍の強さによるものではなからう。そしてこの時代の北方地帯居住者を所謂北方民族と考えるべきでもなからう。

いずれにしても、これより後、モンゴリアにあつては、

洪武二十三年二月甲辰に

遣使曰詢及來胡言、殘胡甚少、騎者纔五千人、共家屬一萬口。

とあつて、さしもの北歸も全く失敗に終つてモンゴリアはまさに空虚となつてしまつた。

これに反して、元朝ゆかりの來降來歸者は、モンゴリア・マンデユリア合せて、少くとも六十萬と推定され、莫大な數となつた。彼らは明朝治下に入つて果して、どのような役割を果たすことになつたであらうか。

## 二、明朝治下の蒙古人

廣く明朝治下の蒙古人と云えば、これまで述べてきた洪武元年元朝崩壞とともに北歸して再び中國に歸つてきた蒙古人の外に、すでに元年以前に太祖（朱元璋）の支配下に入つていた蒙古人についても觸れなければならない。明朝治下で最初に活躍したのはむしろ、この後者に屬する人々であらう。

明朝は比較的短期間に中國統一に成功したが、これは元朝治下の蒙古人とくに漢人の文武官を招撫し、これを利用しえたことにもよる。太祖は、このために中國統一の過程

中においても詔を發して、元朝に仕えていた者でも材能あるものは擢用することを明らかにしている。明朝は征服王朝となつて外部から文武官要員を多量に補給しえないし、また中國も明代ともなれば職業的分業化、専門化は進んでおり、文武官僚といえども短時日の間に養成しえられるものでもない。したがつて統一後も漸定的と云う點はまぬがれないにしても元朝に仕えていた人々を多く重用した。これについては、個々の具體的な例をいち／＼あげるまでもなく、實錄洪武三年六月壬申の記事をあげれば充分である。すなわち、このとき左副將軍李文忠の軍が北進して大勝を収めるとともに順帝の死を報じてきた。そこで百官相ひきいて拜賀を行なつたが太祖はことさら禮部に命じて、「かつて元に仕えたものは拜賀を稱えるを許さず」と云う揭示を出させた。これは、當時の中央官僚の中に元に仕えていたものがかなり多くあり、彼らの立場をことさらに考慮しての處置であらう。そのうちの大部分は元朝に仕えた漢人であることは想像にかたくない。しかし、蒙古人や色目人もかなり多かつたようである。統一過程の中の詔の中にも特に蒙古・色目人で材能あるものを採用することを明



らかにしているが、統一後の淮安府海州儒學生曾東正の上疏<sup>⑨</sup>の中にも、「蒙古・色目人で、仕を求めて官に入り願要に登る者あり、富商大賈となる者あり」とある。元代の活躍から考えれば、大賈富商には色目人が多いとしても、文武の高級官僚には蒙古人が多かったと思われる。しかし、現在では彼らの活躍の實態を知るのは甚だ困難である。

それと云うのも、彼らが姓名を漢姓に改めてしまつており、このため「華人と異なることない」有様であつた。そのうへ、史料を残した明人は、明朝が蒙古色目人らの力を借りた事實を明らかにすることを好まなかつたであらうし、ことさらその素姓をせんさくしなかつたためで、蒙古名と漢名を對照して知りうるものがない。

しかし洪武三年四月には、公けに蒙古色目人の改姓を禁止することになった。實錄三年四月甲子に、

禁蒙古色目人更易姓氏。

とある。この「更易姓氏」を禁じた目的は別としても、當時彼らのなかには、中國流に姓名を名のつたものが意外に多かつたことがうかがえる。ただ附言しておきたいことはこの禁令は必ずしも嚴重に守られたわけではなく、洪武九

年三月癸未の、

以火你赤爲翰林蒙古編修、更其姓名曰霍莊。

とか、洪武二十一年來歸して通譯官になつた韃靼人丑驢は太祖自身から李賢の姓名を賜つており、太祖みづからこの禁令を犯した。

これから見ると、太祖が禁令を發した主旨は、君主が賜わるものは例外として認めるが、本人の自由意志だけにとづく改姓は禁ずる。云いかえれば、實際の効果は問わないで、單に君主の特權を明らかにし、君主權の強化を示すものであるうか。あるいはまた、洪武三年をさかいにして、それまでの改姓は個人の自由意志にもとづくものも認める。要するに中國統一完成以前に改姓した蒙古人は明朝に貢獻したものととして漢人同様の待遇を認めるが、三年以後に來降來歸してきた蒙古人は、一旦北歸して抵抗意志を明らかにしたものではありません、勝手な改姓は認めない、云わば同じ蒙古人でも三年をさかいにして差別待遇をすべきであるという政治的配慮を示す禁令とも云えようか。

ともあれ洪武以前に元朝を離れた蒙古人については明らかにしえないが、これは當面私の研究對象でもないし、こ

ここでは中心を、北歸後再び中國に流入してきた蒙古人の明朝治下でのあり方に止めておこう。

まずその一例をあげるならば、洪武三年五月明軍に降つた買的里八剌は崇禮侯に封ぜられ、その母妃と同居を許されたばかりでなく、龍光山に邸宅を賜い、衣食を支給されて厚くもてなされた。つづいて七月には買的里八剌母妃以下に鍍金銀の首飾、紗羅布製の衣服が下賜され、八月には家人にその家口の多寡に應じて取りあえず一年分の薪米が支給された。これは買的里八剌が帝王の子孫と云う點もあるが、反抗した蒙古人としては特別の厚遇であつて、蒙古人の反明感情を柔らげるための政策であり、宣傳を含めた特殊な事例に屬する。

來降來歸の一般の場合はどうかと云えば、三年四月俘虜された王保保の部衆は、明の軍兵が少ないので直ちに四川討伐軍に轉用されている。また四年十二月の故元の惠王伯都不花や儲王伯顔不花、宗王の子蠻蠻伯帖木兒らは當時の京師すなわち南京に送られたが、同じ時に和尚帖木兒および諸官屬は北平に留められている。五年十月の韃靼五千九百人は臨濠に居住を許された。このように來降した人々の

送りさきは地域も廣くその時によつて異つてゐる。また給與の物品についても、二年九月の故元降將虎都帖木兒らの場合は、冠帶襲衣・袷褥及文幣二疋・素紬二十四・帛四十疋・綿二十斤さらに白金二百兩・米六十石などを賜わり、その従人にも紬絹衣服・皮襖・靴襪が支給されている。これに反して、臨濠に居住させられた韃靼五千九百人にはただ薪米が支給されただけである。このほかその中間のものとしては「第宅・月糧を給する」などあり、洪武のはじめころは、その場に應じて處置されたやうで、明確な規準はなかつたと思われる。しかし、最低の者は生命を維持する程度に、最高の者は貴族程度に、待遇條件は種々の段階に行きわたつてゐる。この支給額の相違は、恐らく北方における社會的階級とか來降・來歸・捕獲などの明軍に対する抵抗の度合によつて異つたものであらう。

さてこうした明朝の待遇は一般的に見ても、一時は反明態勢を明らかにした者に對してとすればやはり優遇と云えよう。これはまだ北方に残る殘存勢力の懷柔策でもある。私はさきに北歸の蒙古人は數年の間に遊牧に轉化出來ないで自己崩壊し、自發的に積極的に、つぎ／＼に來降來歸し

たことを述べておいたが、來降來歸と云つても、このような明朝の生活保障があつたればこそ急速に多量に行なわれたのであつて、「來歸・來降」はこの明朝の「優遇」と表裏の關係にあることは云うまでもない。そして彼らの優遇法も概して生活の保障に向けられていた。

しかしその中であつて、洪武三年七月丙申には、

故元參將脫火赤等、自忙忽灘來歸、詔賜冠服、置忙忽軍民千戶所、隸綏德衛、以脫火赤爲副千戶。

のように、脫火赤を明の軍人の階級である副千戶に任用し、同時に來歸した人々の指揮官とし、明の軍制である衛所制の下部にあたる千戶所をことさら設置して綏德衛に所屬させている。同じようなことは九月にもある。

故元宗王札木赤・指揮把都・百戶賽因不花等十一人、自官山來降、詔中書、厚加宴勞、立官山等處軍民千戶所、以把都爲正千戶、賽因不花等三人爲百戶。

この官山千戶所は八年に更に來降者を加えて、官山衛となり大同都衛に所屬するようになった。

こうして明朝は來歸來降者に明軍の一翼を荷わせたのである。このことは一面から云えば北方が安定していないだけに、甚だ危険なことである。明朝の高官の中にもこれ

に危惧の念をいだく者もあつた。

洪武三年十二月に省臣の言として「まだ北方の情勢は安定していない。來歸者といえども何時また反亂を起すかわからない。反亂を起してからでは制御するのに容易ではない。それ故西北諸虜の歸附して來たものは、邊境附近に居らすべきではなく、内地に遷さなければ危険である。」と。これに對して太祖は、「胡虜を治めるのは、その性に順うべきである。胡人は北におつて苦寒にはなれているが、これを内地にうつせば、かえつて其の本性を失つて反亂を起しやすい。それゆえ邊地に居らせ、良い場所をえらんで牧畜など好きなように生活させておけば、自然に安んずるであらう」と答えている。太祖の政策の當否は別として、この來降者を邊境に位置せしめる方針が明らかにされると、四年正月には、

故元樞密都連帖木兒等、自東勝州來降。詔置、失寶赤千戶所一、百戶所十一。五花城千戶所一、百戶所五。斡魯忽奴千戶所一、百戶所十。燕只千戶所一、百戶所十。瓮吉剌千戶所一、百戶所六。以都連帖木兒・劉朵兒・只丑的爲千戶、給三所印。復遣侍儀司通事舍人馬哈麻、賡燕只・瓮吉剌千戶所印二、往東勝州・命伯顏帖木兒・答海・馬里卜蘭・歹也里沙梁・列圖闊闊爲千戶。

とあり、明朝は來降者のために多くの千戸所・百戸所を設置し、北方にあるころの從屬關係をそのままにして明軍の河州衛に所屬させている。この月には、このほかに、武靖・岐山・高昌の三衛を設置したが、武靖衛は卜納刺、岐山衛は朵兒只班、高昌衛は和尚をそれ／＼指揮同知に、任命している。また何鎖南普を河州衛指揮同知、朵兒只班家奴を指揮僉事となし世襲せしめ、千戸所八、軍民千戸所一、百戸所七、軍民百戸所二を領有せしめた。このほかにも元の降將沙不丁を驍騎前衛副千戸にあてている。彼は二十一年七月大寧衛指揮僉事に拔擢された。しかしこれらのうちには、北と云うよりは西、蒙古人と云うよりは西域人も含まれており來降者の中でも信賴出來るものをえらんで、任命したものであろう。とくに卜納刺の如きは、元の世祖第七子西平王奧魯知五世の孫ではあるが吐蕃の部衆をひきいて明朝に歸附したもので、直接北元とは關係ない。しかし、歸附すれば、部屬組織はそのままの型で明軍の衛所制に組み入れられている。また四年八月に鞏昌故元總帥府を罷めて衛に改變したのも、これよりさき汪靈眞保・虎都帖木兒らが來降したときには取りあえず元の制度をそのまま踏襲

させたが、この時になつて明の衛所制に組入れたものである。四年・五年中にもこのような例はしばしば見られる。それでも七年・八年になると蒙古人の來降者とくに大同附近のものが増加してくる。七年七月の察罕腦兒衛、八年三月の官山衛の設置などがその一例である。これは七年をさかいにして明朝の政策に變化が起つたことによるものである。七年以前は、二年四月大將軍徐達に下した勅諭に「若其來降、宜審處之、勿墮其計也」とあるように相當慎重な態度で臨んでおり、原則として來降者の處置はどこへ送るにしても中央政府の指示に従つたようである。しかるに七年三月になると「自今、有來歸者、爾等善撫綏之」と代り、これまでのように、すべて中央政府の處置を仰がなくても最高責任者が適當に處置せよと云うことになつた。この時の直接の動機は來降者が南京に輸送中に逃げたのが原因になつているが、當時モンゴリアにあつては元朝の回復をはかるような強力な中心勢力はすでになく、北方からの危険も次第に少なくなつたから、まだ多少不安のある來降者でも責任者がよく監督しさえすれば、北邊に置いて反亂の心配は少く、それに來降者を南京はじめ諸處へ配置さ

せるには大きな手数がかかる。このような手数をはぶく意味で北邊で處置せよと云うことになつたと思われる。いずれにせよ七年以降の來降者はこれまでより北邊で處置されるものが多くなつた。とくに興味をひくのは、蒙古衛の設置過程である。八年五月丙戌に故元廣平王保咱らが大同より來降したが、このとき明朝では保咱を蒙古右衛指揮僉事に任命している。ところが當時は蒙古右衛は存在していなかつた。これまでの蒙古衛を左右二衛に分つて、蒙古右衛が設置されたのは六月に入つてからである。これから見ると衛所の設置は來降者の處遇のためであると言ふことが出来る。おそらく明朝は彼らに直ちに北邊防衛を期待したわけではなからう。むしろ彼らは明朝の處遇如何によつては、何時反亂をおこすかわからない云わば明朝にとつて危険な人々とみるべきである。それならば明朝として彼らをきびしく處置すればよいかと云えば、マンヂュリアをも含めて北方にいるまだ來降してこない人々に悪影響を及ぼすことになる。したがつて衣食住などもかえつて充分支給してやらなければならぬ。この衛所は明朝にとつては甚だ取扱いいにくい來降者の收容所の施設としての衛所であらう。<sup>⑧</sup>

だし、以上あげた例は殆んどが最も周邊に屬する地域であり、その所在は詳しく知りえないまでも長城附近、それも長城外と考えられる。それならば長城内の衛所についてはどうかと云うに、これについては明朝の軍政上の機密として明らかにしていない。實錄も衛所の設置について、特別のものを除きただ新たに衛所をおくただけ記して、その設置の理由とか具體的な内容については記していない。

しかし明初の衛所の軍士の來源は從征・歸附・謫發と埽集によるものの四種類からなると云われている。<sup>⑨</sup>このうち謫發とは罪によつて軍にあてられたもので云わば流罪人を軍人にしたものである。なかには罪によつて一族殺されるところを、特に死を免じて恩軍と呼び軍にあてられたものすらある。恐らく、洪武の中期ごろから胡惟庸の亂の如き功臣の彈壓政策によつて一度に何萬と罪せられたが、これらの罪人を遠く邊境地帯に流して軍として一族、代々義務を負せたものである。明朝にとつては甚だ危険な人々である。また埽集は本來一般民戸のうちから強制的に軍に徵發したもので、多くは雜用・屯田用にあてられたものである。うが、當初はおそらく何時逃亡するとも知れず、むしろ監

視を必要とする存在であつたろう。歸附者もまた幾分事情は異なるにしても、一面危険なところもある。したがつて長城内の衛所といえども、ただ長城外のものより人的構成が複雑であることが異つているだけで收容所の性格をもつものも存在していたであらうことが推測される。そして、北邊に數多く設置された衛所のなかにも、やはりこのようなものも含まれていたと見てよい。

もちろん、親衛軍とか中央軍のような軍事専門の目的のもとに設置されたものもあり、これが、むしろ本來のものであらう。北邊について云うならば、北京には洪武十七年十月當時十七衛が設置されており、その中に十萬五千四百七十一人が居住していたが、これらは北平都指揮使司や燕王の護衛など、軍事基地中心の衛所であり、大同なども地方軍事基地として設置されたものである。こうしてみると、衛所と云つても、軍事基地的なものと、收容所的なものの二種に分類することが出来る。<sup>⑤</sup>そしてその比率は收容所的衛所が増加するとともに軍事的衛所の方は次第に減少してきた。それと云うのも明朝興起のころは一般漢人が兵隊として統一戦争に参加したが、一旦統一が完成すると、彼ら

は軍人のままでおるよりは故郷に歸つて、本業に就くであらう。例えば洪武十年十月、良家の子弟の驍騎舍人に充てられている者を放還したのもその一端を物語っている。

さて、收容所的衛所のなかでは特異な存在として、宣傳用をかねて比較的優遇されていた歸附者も、北方のうれいが少くなり宣傳價值が減少するとともに、結局は被征服者として、冷遇的隸屬化を強いられるようになった。

そのあらわれは、十六年二月、故元の軍士が所有していた私有民を解放せよと云う命令にあらわれた。これは元朝のころの身分的結合關係を解體させ、かつての支配階級を無力化させたものである。また二十二年四月ともなると、故元諸王の來降者は耽羅國に居住するように處置された。これは同じ來降者でもこれまでのものと待遇が大部惡くなつてきたことを示す。談遷もこれを評して「元裔の來降者は生活の資を俸給として明朝に仰ぐのが普通である。いま耽羅國に流されては、收入の道もなく、ただ死を待つばかりである。おそらく遠人慕化の初心にあらざるなり」と云っている。<sup>⑥</sup>

こうして歸附者の特別優遇は次第に剝奪されていった

が、特に目立つのは屯田である。屯田はすでに洪武六年四月に寧夏に行なわれたのが最初とされ、このときは流亡を招集して行なっている。その後も次第に増加したが、最も徹底的に行なわれたのは二十五年二月の、

天下の衛所の軍卒は今後七割屯種三割城守。

と云う原則が發表されたときからである。この主旨は北邊について云うならば、これまで南方から食糧・衣服などを多額の費用と多大の勞力を以て輸送してきたが、これでは政府の負擔があまりに大きすぎるから自給自足を立てまゑとする方針に切りかえたものである。と同時に元末明初の戦亂によつて發生した無主の荒蕪地の開拓をはかつたものであらう。それにしてもこの七對三の比率は一見大變革を示すようであるが實はそれ程のこととも思えない。七對三はあくまで原則であつて個々の衛所について見れば、軍事基地的衛所はそれ程屯田に軍士をさくわけにはいかないし、相變らず軍事的な面を維持していただらう。それ故七對三の比率は衛所制全體から見れば、その性格上三割の衛所が城守即軍事的性格の強いものとして残つたことを示す。あと七割の屯田衛所は一部がこれまでの軍事的なものから改

編されて充當されたかも知れないが、また七對三の比率を満すために、政府はことさらに招集を行なつて新たに屯田専門の衛所も設立している<sup>⑧</sup>。しかし、その多くはかつての收容所的衛所が切り變えられたものである。もつともこの收容所的衛所も實質的には、これより前から次第に屯田を中心とする衛所に移行していたと推測される。ただ強いて云えば、この切りかえで比較的被害の大きかつたのは歸附者であらう。

結局政情の安定が歸附者の隸屬性を強化して、彼らをより強く屯田要員として義務づけてしまつたと解される。こうしてみると、よく「北邊の衛所設置の目的は北方防衛のため」と云われるが、全面的に北方防衛的機能をもつようになつたのは北方民族の大規模な侵入事件のおこる明代中末期のことで、洪武期の設置當初は、收容所のあるいは屯田用の衛所とも云われるものがかなりあつたと推測される。

さて以上は歸附者一般について述べたものである。そのなかには漢人軍も多く含まれているわけであるが、當面の主題である蒙古人に限定した史料もいくつか見られる。それによると洪武五年のころは、「故元の官屬子孫は軍士と

伍をなすを許さず」とあり、また胡騎指揮と言う官名があるように特別に區分されていた。これは混合することによつて混亂摩擦の發生することを未然に防ぐこともあらうが、一つには彼らを隔離して、優遇したことを意味するであらう。しかるに二十六年には舊降胡兵は彼らだけで集結させておくに勝手な振舞いをすると言うので參錯して伍としたがよいと云うように、變つてきた。こうして、他の一般軍士をまじえて同じ條件にしてしまつた。特に屯田の如きは、彼らの望む所でなかつたと思われるのに農業耕作者にまで下した。これは永樂時代になつてからも、どの程度かは明かでないが、戰士にかんげんされた。また二十七年に、蒙古民族の間には、父とか兄弟が死んだ場合その妻をめとする風習があつた。これは（中國的）道德から云えば好ましくないもので、大誥を著した時に禁止したがまだ近ごろも行なわれているからこれを嚴重に取りしまるようによよ、と禮部に指示している。これらは太祖としては蒙古人を教化する意圖のもとに企てた政策であらうが、蒙古人にとつては、迷惑な干渉であり、壓迫であつて、不滿とする所であつたらう。このように太祖自體はむしろ當然と考えて

の施策までが、蒙古人とか漢人を含めての元朝からの歸附者に取つては壓迫と受けとれるものが、豫想外の軍事政事上の圓滑な進展とともに強行され始めた。太祖のこの意圖が明らかにしたのは、實はすでに洪武二十二年のことである。十一月己丑朔の、

上御謹身殿、翰林院學士劉三吾侍、因論治民之道。三吾言、南北風俗不同、有可以德化、有當以威制、上曰、地有南北、民無兩心。帝王一視同仁、豈有彼此之間、汝謂南方風氣柔弱、故可以德化、北方風氣剛勁、故當以威制、然君子小人何地無之、君子懷德、小人畏威、施之各有修當、烏可槩以一言乎、三吾悚服稽首而退。

である。二十二年十一月と云えば納哈出の來降により北方民族からの憂が除かれたときであり、華北政策についても一つの轉期であつて、今後如何に華北を治むべきが問題になつたものであらう。このなかで劉三吾は、南北の相違を強調し、北方に對しては威を以て、すなわち強力な軍勢力を背景に治めなければならないことを主張している。しかるに太祖は一視同仁で、區別を設けて臨むべきではないと説きかかせている。

太祖の意圖は具體的に知るよしもないが、北方に對して



も武力によらないで、政治力、ひいては太祖の詔勅の威力だけで治めて見せると云う意味であろう。このあらわれが屯田であり、垛集であり、軍事力をかりなくとも華北を隸屬化して見せる態度である。これは華北の實態とくに歸附者の不満を無視し、彼らの力を誤った自己過信と考えられる。靖難の變の成功もこのような不満の爆發したことがその一因をなしたと考えられる。

### 三、「靖難の變」と蒙古人

一般に靖難の變は、南京政府が諸王勢力の削減をはかつて壓迫を加えたために、これに反抗して燕王（後の成祖）が起兵し、帝位の篡奪に成功した事件であるとされている。そしてこの變の成功の原因の主なものとしては、燕王が北方に對する防衛の意味から大部隊を支配下において、大きな勢力をもっていたことがあげられている。しかしこの點については、なお多少詳しく述べる必要がある。支配下におくと云つても、燕王が直接指揮し得る軍隊は、王府の護衛と云つて僅かなものである。しかもこの護衛は明朝の軍隊制度の一部をなすため、都督府の管轄下におかれて

はいるが、都督府―都指揮使司―衛―千戶所―百戶所と云う明朝の軍隊制度の主流をなす組織には入らないで、都指揮使司と同格の待遇を受けるが例外的なものである。従つて制度的には北邊の衛所に對する統帥權はなかつた。しかし實際問題として燕王は洪武二十三年に晉王らとともに長城以北に出軍したのをはじめしばしば重要軍事行動を行なつており、この時にも臨時に統帥權を與えられて北邊諸衛の軍隊を指揮した。従つてこれらの機會に廣い意味での支配權を持つようになったと云うことも考えられないわけではない。しかし起兵後の行動を見ると、燕王は同じ北京に設置されている北邊の最も重要な軍事機關である北平都（指揮使）司の對策に最も苦心を拂い、これがために幾度か彼の行動はけんせいされている。また例えば北邊における重要な軍事基地であり、收容所的衛所に對して監督的立場にもあつたと思われる大同からは、しばしば攻撃を受けた。燕王がこれを攻め破るのに成功したのは建文二年二月すなわち起兵後九個月のころである。しかも大同都指揮房昭は敗走の後も徹底的に燕王に反抗し、建文三年まで各地でその行動を妨害したほどである。このような軍事基地的

衛所は中央政府軍の支配下に入つてはおつたが、決して燕王の支配下には入っていない。また燕王が行動を起したとき、最初にその対象となつたのは通州・薊州・遵化・懷來・永平等で、軍事基地としてはそれ程重要でない、云わば收容所的衛所の所在地である。これらにしても燕王自ら軍を進めてはじめて降つていたのであつて、簡単に統屬關係にもとづく支配下の衛所とばかりは云い難い。ただし、これらの衛所の多くは燕王が近ずけば抵抗することなく降つてゐる。これは、燕王の軍をおそれたのではなく、南京政府に不満を持つていた歸附者らが反南京政府と云う點で燕王の軍に積極的に参加してその軍勢力となつたものと見てよからう。燕王にして見れば、あらかじめそう云うことを計算に入れての行動ではなからうか。

このような點で、これまでに論争の行なわれているが大寧の歸屬問題である。

大寧は元朝の北徒のころ、その有力な根據地であつたが、明軍の攻略を受けて、洪武五年にはその支配下に入つた。

明朝はこれを十三年に府として北平布政司の管轄に入れたが、間もなく廢し、二十年八月改めて大寧衛とした。實錄

によればこのときは將士の罪ある者を送つたとある。翌九月には大寧都指揮使司および大寧中左右の三衛を置き、會州・木榆・新城等の衛を之に所屬せしめ、周興・吳研を以て都指揮使とし各衛の兵二萬一千七百八十餘人を以てその城を守らせた。又同じ日に左副將軍傅友德に詔して、新たに歸附した軍士を集め、かつ精銳なものをえらんで大寧に屯駐せしめた。この新附とは云うまでもなく納哈出來降にもとづく歸附者である。従つて大寧衛の設置もその主要部分は來降者の處置のためである。それにしてもこの時の來降者があまりに多かつたため、衛所も同時に三つ設けられ、しかもその上に都指揮使司を置かなければならない程であつた。九月に入ると、とりあえず山東諸府の民間に詔して、戰饑二十萬を作らせて支給している。翌年二月には、内地との間に馬驛を設けたり北平都指揮使司に命じて、新籍の軍士を調して大寧に行き舊軍と代還せしめたり、七月には北平行都指揮使司を置き、また當時北京にいた故元將の阿速を大寧前衛指揮僉事に、沙不丁を大寧後衛指揮僉事に任用して、同じ蒙古人ながら來降後長年月を経た彼らを新附の者の間に混在せしめた。こうして明朝はともすれば初め

處置に窮した形で大寧に對して種々の對策をほどこした。

しかし二十二年正月には大寧城の修拓を行ない、倉廩營房をつくつてこの頃から設備をととのえはじめた。このような設備もとのつた所には來降の蒙古人も居住を希望したと見えて、知院捏怯來がここに居住屯種を願ひ出ている。

これは實現を見なくて、捏怯來のためには大寧より更に北に全寧衛を置いて彼を指揮使にあてたが、その糧食を大寧から補給させた<sup>⑤</sup>。そして、その大寧を更に充實させるために中鹽法をも適用したし、綿布綿花を大量に支給もした。こうして大寧は北邊の重要據點として整備された。そのうえ二十三年八月には儒學を置いて蒙古字を知る者をえらんで教官とし蒙古人の教化をはかり二十五年には武職の官で大寧に謫成されたものは皆その官に復すと云う詔が出され、不隱なものを取り除いた。およそこれらはすべて、二十六年正月の太祖の第十六子寧王權の就藩の準備でもあつた。寧王就藩の後も整備は續けられ、驛傳の制が完備され、二十九年には農器具が支給された。その結果でもあらうか、二十一年正月には大寧の儲粟六十二萬石に及んだと云われる。

こうして大寧は北京とともに北方における最も重要な據

點となつた。しかし寧王が就藩したところから蒙古人は被支配者として被征服民的待遇にあまじなければならなくなつたであらうし、農業勞働を強制されて不滿をいだくようになつたであらう。たまたま太祖が死に、燕王が靖難の變を起したが、燕王は建文元年十月、すなわち起兵後間もなくこの大寧を襲つたのである。このとき大寧は簡単に燕王の手中に歸した。そしてこれまでに蓄積されていた莫大な物資がすべて燕王によつて運び去られ、このため大寧城は全くなにもなくなつたと云われる。そればかりでなく、南京政府からこの時すでに創奪されたが、なお城中に留つていた寧王三護衛の兵及び多くの蒙古人が燕王の支配下に入つた。この強力部隊をえて燕王は、早速、軍隊の編成替を行ない、これまでの軍を五軍に分つて彼らを分屬させ以後の戰鬪に強力な中心をえたようで、「兵益盛」と云われている。

ただ、ここで燕王は大寧の軍ばかりでなく、兀良哈三衛とくにそのうちでも朵顏衛の胡騎をも味方の戦力に組み入れることに成功したと云われる。明史三衛傳にも、

成祖從燕起靖難、患寧王驕其後、自永平攻大寧入之、謀脅寧王

因厚賂三衛、說之來。成祖行、寧王饒諸郊、三衛從、一呼皆起、遂擁寧王西入關。成祖復選其三千人爲奇兵從戰、天下既定、徙寧王南昌、徙行都司於保定、遂盡割大寧地、昇三衛、以償前勞。

とある。三衛は洪武二十二年來降した故元の遼王阿扎失里らのために兀良哈の地に設置された明朝の衛所である。彼らは大寧衛居住の蒙古人と異つてなお遊牧生活を送つていた。燕王は大寧滞在數日間に入つた蒙古人を通じて、より秀れた同族の騎馬部隊をひき入れようと劃策したとすれば、起りうることである。しかるに和田博士は、この説は小説であつて史實ではないと述べておられる。その理由として、「この説は鄭曉の吾學編、王世貞の三衛志以來一般の通説に従つたものだが明史三衛傳の直接の典據は恐らく清の谷應泰の明史紀事本末卷十六の燕王起兵でなければならぬ」として、紀事本末の建文元年十月の記事をあげ「詳細目に見える如くして却つて頗る小説的の疑がある」と述べ、この記事の出處を推測し、「且考えて見るに明一代の間頗る小説綺語が流行した。中にも建文遜國の事は最も世人の同情を刺激し種々の憶測を逞しうせしめた。」そうして「明末の正徳・嘉靖・萬曆の頃に及んで、建文帝

一黨に對する禁諱の弛むと共に諸說叢起してやがて實錄との區別がつき難くなつたものであらう。」と結んでおられる。なる程明實錄には、この記事は出てこない。しかし建文四年間については、成祖も篡奪の汚名をつけられることを嫌つて、太祖實錄の中に組入れるとともに全く簡略なものにしてしまつたことは有名である。これに對して國權には詳しく述べられている。國權は永樂帝の呼稱も燕庶人と記し、實錄が上とか朕を用いているのと對照的で、南京政府の史料をもとにしていてと思われる。これによると、さきの明史三衛傳、明史紀事本末の記事とほぼ同一のものが見られるばかりでなく、燕王の大寧略取以前の七月壬辰には、建文帝が長興侯耿炳文を征北大將軍に任命し、三十萬の兵をひきいて燕王を討たせた記事がある。そのさい北征の將士をさとしたときの問答に、

謂燕人不足憂、齊泰・黃子澄等、以北兵強、兼誘朵顏諸虜、不  
早禦之、將遂失河北、故大兵焉。

とあり、南京政府の重臣達は燕王が朵顏の諸虜を誘い入れることを豫測していたのである。皮肉にもこの心配が適中して、南京軍が敗れたものであらう。また建文三年十一月

には、「北虜通燕、寇鐵嶺衛、殺百戶彭城」とある。これはこのころ遼東總兵官都督楊文が最も頑強に燕王に對抗し、一萬人をひきいて永平を攻撃したりしているのに對し背後からけんせいしたものであろう。こうして見ると、大寧略取當時燕王に直接參加した三衛の一部の胡騎ばかりでなく、その後においても未參加のまま北邊に残つた北虜が間接に燕王を援助したと見られる。それ故にこそ、永樂元年五月世祖はことさら兀良哈の官軍人らに「歲時貢獻、經商市易は一に便なる所に從うべし」と云う、特別待遇の勅を下し、又二年四月朝貢してきたときにも、脫兒火察を左軍都督府都督僉事と云う最高級官に任命し、そのほか、哈兒兒歹を都指揮同知に任命し、朶顏衛を管掌させ、安出および土不申を都指揮僉事として福餘衛を管掌させ、忽剌班胡を都指揮僉事として泰寧衛を管掌させ、その外にも三百五十七人に指揮千百戶等の官を授けて、特別に優遇した、と見ることが出来るであらう。

ともあれ、燕王はこのようなにして、大寧などの蒙古騎兵を自軍に組み入れて強化し、靖難の變をおしすすめた。彼らの活躍は目覺しいものであつたらう。ついでながら、戦

闘中における燕王の胡騎についての態度を示す一・二の事例をあげて見よう。

實錄建文二年四月己未の記事によれば、このとき南京軍の李景隆らが百萬と號して一大決戦をいどんできた。南京軍の中にも早くに南方へまわされた歸附者が入つていたよう、夕暮胡騎三百が寢返りをうつて燕軍に來降してきつた。そこで燕王は彼らを衛に宿せしめた。ところが、その監理者である省吉が激戦中のこととて、早まつて之を殺してしまつた。燕王はそれを知らず翌朝早く、胡騎の降者はいづくにありやと問うたところが、殺してしまつたことを知り大いに怒つた、とある。胡騎をいかに大切にしたかが知られる。また、四年六月南征の折、南下して浦子口に至つたが、このとき、燕王は南京軍の盛庸等の反撃を受けて大敗し、地を割して和睦しようとした。そこへ燕王の次子高煦が胡騎をひきいて助けに來た。あまりのうれしさに燕王はその背をたたいて「勉之、世子多疾、如得天下、以若爲嗣」と云つて、次の君主にすることを約束してしまつた程である（後にこれが問題になる）。その期待に答えて高煦は先登に立つて進撃し燕軍は勝利を収めることが出來たが胡

騎の威力によるものと解してよからう。成祖はこうして彼らの力をかりて四年を費して靖難の變に成功したのであるが、考えて見れば、明朝も統一後三十年を経過しており、一應創業の時代をすぎたのであつて、一地方の叛亂が天下をくつがえすとは思ひもよらぬことである。おそらく燕王自身、同族、同郷などの血縁的・地縁的結合による強い協力者を期待することは出来なかつたであらう。南京政府でも燕王うれうるに足らずと云つた根據は燕王個人をさしたものでなく、燕王に味方する信頼しうる支持者がないことを云つたものであらう。燕王にしてもほぼ信頼しうるものは三護衛のみである。附近にある軍隊は強力なものは北平都指揮使はじめ、多くは南京政府直系のものである。この中にあつて難事業を成しとげたのは、燕王自身の才能は云うまでもないとして、廣く華北の不滿分子の應援、その中でも歸附の軍隊の協力、さらにその中の蒙古人の積極的な活躍によるものである。ただし、蒙古人の活躍と云つても所謂指導者統率者は割合に少なく、直接戦闘の最前線に加わつた者が多かつたため、それ程目立つた功績は認められない。變後の論功行賞でも第一の功積者である邱福は

じめ主なものやはり燕山護衛の漢人である。しかしこの中でも、漢姓を名乗つて不明なものは別として、燕山中護衛千戸出身の火眞は都督僉事に拔擢され同安侯に封ぜられた。また洪武中歸附し蒙古名を脱歡と云つた薛斌も燕山右護衛指揮僉事から起兵に従つてその功によつて永順伯に封ぜられ、その弟薛貴（蒙古名脱火赤）も起兵に参加した。あるいは元の工部尚書、洪武二十一年來歸、蒙古名丑驢、中國名李賢ものに右軍都督僉事、忠勤伯に封ぜられた。そのほか元の遼陽行省右丞、初名買驢、中國名吳誠も永平衛百戸から從戰して功を收めたし、滕定も元の樞密知院、洪武中來歸、姓を賜わり起兵に参加。元の右丞相伯顔卜花の孫の毛勝も洪武中歸附して靖難の功によつて都指揮同知に至つてゐる。しかしこれらはえらばた少數の人々である。むしろ蒙古人の活躍は下級武官であり一般兵士であつたろう。建文四年永樂元年などの論功行賞に名をつらねた人々のうちなお蒙古名を名乗る下級武官は、實錄に名をつらねるものについてだけでも數え切れない。一般兵に至つてはさらに想像にかたくない。

つぎに成祖のこれら蒙古人の活躍にむいた待遇を示す

總括的かつもつとも象徴的な例をあけておこう。それは永樂元年九月のことであるが、「賜各衛胡人姓名」と云うので、世祖が各衛に分屬している胡人にその功績にむくいるため漢姓名を與えたものであろう。しかるに皮肉にも翌十月には、

上謂兵部尙書曰、武臣中有韃靼人多不識字難委以政。故只令食祿、遇有警急、則用以征伐、今中國人亦有冒韃靼名以避政事者、其曉諭改正、不改正者罪之。

とある。今度は逆に蒙古人の特別待遇にあやかろうと、中國人の勝手に韃靼名を名乗るものが多くなつたことを知る。これは洪武三年の「禁蒙古色目人更易姓氏」と全く對照的である。洪武が蒙古人不遇時代ならば永樂は蒙古人特權時代と云えよう。こうして「永樂帝は蒙古人の子孫なり」と云う俗説すらあらわれる程になつたが、外においては永樂初期蒙古人の來歸、しかもことさら「内屬」を條件とする來歸を促し、内にあつては、永樂初期交趾遠征で得た鐵砲をもとにして編成された神機衛とともに、蒙古人の精銳三千をもつてあてた三千營が京軍の中心部隊となつて活躍したのである。

後の事ではあり多少事情も異なると思うが、正統元年十月の行在吏部主事李賢の言葉をかりれば、

切見、京師達人不下萬餘、較之畿民、三分之一。其月支俸米、較之在朝官員、亦三分之一。而實支之數、或全或半、又倍之矣。且以米俸言之、在京指揮使正三品該俸三十五石、實支一石。而達官則實支十七石五斗。是瞻京官十七員半矣。

とあり、蒙古人が北京の居民の三分の一をしめた様子はまさに壯觀と云うべきである。このようにして北徙後ふたたび明朝に降つた蒙古人は靖難の變を機會に、明朝治下の中國社會で華北勢力の一部として重要な役割を果すともにかつての特權の一部を回復することに成功したのである。

また明朝も靖難の變を轉機として、永樂帝が蒙古人の軍勢力を背景にしたこと、漢人をも含めた歸附者の助力をえたこと、ひいては華北の一般民衆の利害を考慮に入れたことなどによつて、王朝の性格を變化させていくのである。

よく明朝は蒙古人を北方に驅逐して漢人の立てた王朝であると云われる。なるほど洪武期においてはこの説も肯定しえられるが、以上のことから見ると、靖難の變の解釋如何によつては、或いは明一代を通じて見た場合必ずしも全

面的に肯定しえられるものではないと考えられる。なおこの後とくに永樂期における北方地帯の大きな變革、北方遠征の性格、北京遷都意義、軍制の改革、一般政治經濟の變化などを、本論と關聯させつつ結論的に觸れたいと思つたが、これは別の機會にゆずることにする。

## む す び

私は本稿で元末明初の變革期における諸問題を主として蒙古人の立場から關聯をもたせて研究してみた。そうすると、まず最初に問題になるのはモンゴリア復歸のことが考えられる。同じ民族であるならば、たとえ元朝の回復をはかつたとしても一旦は遊牧地帯にひきあげたからには、遊牧生活に還元することが最も望しいと思われる。しかるに明軍の追撃を受けながらも、斬首はもとより斬獲とか擒獲のように戰鬪を交えて敗れたものは意外に少く、武力的抵抗を行なつた形跡はあまり認められない。さりとて騎馬を利用して明軍を避けたわけでもなく、ある者は城廓に根據して無抵抗のまま降つたり、またある者は自發的に集團投降したり、そのほか來降・來歸によるものが殆んどすべて

であつた。これは種々の原因にもよるが、その主なものは遊牧生活への還元・轉化が行ない難いこと、或いはそこまでいかなくても中國社會への經濟的依存關係を斷ち切られたことに起因すると考えられる。こうして降つた蒙古人は、非常に多くの數にのぼつたが、最初は明朝のモンゴリア招撫策もあつて、投降者としては厚く待遇され、なかば監視されながら明の衛所制のなかに組み入れられた。しかしモンゴリアに反明勢力が殆んどなくなり、北方からの憂が除かれると、明朝は彼らを被征服民・被支配者として次第に隸屬化し、終に屯田要員として、政府財政のための農奴的役割を強要するまでになつた。洪武末年の蒙古人は、こうして南京政府の政策に不滿をいだくようになつたが、たまたま燕王が反南京政府起兵を行なつた機會に彼ら本來の能力を發揮することによつて、その主要軍事力の役割を果すことに成功し、中國社會における特權の一部を回復したのである。

この間、間接的ながら征服王朝としての元朝崩壞の理由、定着から遊牧への轉化還元の問題、明代衛所制の性格などについても觸れたつもりである。



## (1) 註

さきに「モンゴリア」と述べたことからすれば、ここは當然「モンゴル人」とでもすべきところであらう。しかし「モンゴリア」と云えば遊牧地帯と云う地域をさし不動のものである。

これに反して「モンゴル人」と云えば直ちに遊牧民を聯想する。ここではむしろ遊牧しない、定着し中國社會の一員となつた人々を対象としたので「蒙古人」としてみた。別に他意はないので、私個人の語感から以下區別して用いたまでである。

(2) 和田清 「明初の蒙古經略」東亞史研究(蒙古篇) (東洋文庫) 以下本稿は、この和田博士の研究に負うところが大きい。

ただし特別なものを除いては、繁雜をさけて註をつけなかつた。

(3) 和田清 「元代蒙古の封禁について」東亞史論叢(生活社)

(4) ここに城郭が築かれたことも、元來遊牧社會の必然的要求から出たものではなからう。元朝の盛時、牧地に定着生活を強いて可能なならしめた結果である。

(5) 吉川幸次郎 「元の諸帝の文學」(四) (東洋史研究九卷一號)

(6) これに對しては、元末の伯顔一派は依然蒙古重心主義をとえており、必ずしも定着していなかつたと云う反論も出るであらう。しかし私は、元末の蒙古重心主義は單なる政争のための主義で、遊牧社會を基盤とした根強いものではないと思う。

(7) 拙稿「アルタン・カーンと板升」(東洋史研究十四卷三號)

(8) この禮部の臣とは誰であるかは判明しない。ただし實錄では遣使致祭故元幼主於沙漠、上命禮部臣曰曩者元運既終、其末帝能知天命、遁歸沙漠。今聞、其子憂猷議理達臘烈、可遣使

吊祭。禮部臣對曰、道理遼遠、使者難至。況彼久離中華、漸變異俗、非典禮所加。

とあり、太祖との問答形式を取っている。このような場合、多くは高官である。禮部尙書とすれば、十一年四月に任ぜられ、九月に卒した朱夢炎で、彼は元の至正十一年の進士である。恐らく禮部尙書か侍郎ぐらいの人であらうが、今後究明することが出来れば、この言の當否、すなわち「十年說」も修正されるべきものか、あるいは妥當であるかも明確にならう。

(9) ここは本來ならば、憂猷議理達臘の葬儀に關するものであるから、「本俗に還る」とすべきである。ことさらに「異俗に變ず」と云つたのは、同じ蒙古人でも元末の蒙古人は全く中國的定着社會に化してしまつていたことを前提とするものである。これから見ると、元朝の北歸は遊牧社會への還元と云うより轉化と云うべきであらうか。

(10) 私としては、このような漢人軍は一應除外したいのであるが、史料の性質上あきらかに區別することは困難であるため、これより以下述べるところでも漢人軍と想像されるものについても一應區別を設けず述べて行く、ただしこの漢人軍といえども、元朝北徙以前長城以南で降つた多くの漢人軍あるいは蒙古軍とすら、比較すればともかく明軍に抵抗する意志をもつて北徙したのであるから、ある意味においては、より元朝支配階級の蒙古人に近いものであるとも云えよう。

(11) 和田清 「明初の滿洲經略」東亞史研究(滿洲篇)(東洋文庫)

(12) 實錄洪武九年閏九月丙午

(13) 來降者の收容所的性格をもつ衛所は必ずしも北邊ばかりでな

かつたようで例えば洪武九年十一月壬辰の、「故元保寧王雅納失里宗王洋古圖別里帖木兒把的忙哥者乃馬歹等及遼陽行省左丞速哥禿等自大同來降。俱授浙江等衛所鎮撫。とあり、來降したばかりの蒙古人を浙江地方で直ちに明軍の戦力としたとは思われず、これまた收容所の性格のものと考えられる。

(14) 明史卷九十、(兵志二) 其取兵有從征、有歸附、有謫發。

明史卷九十二、(兵志四) 明初採集令行、民出一丁爲軍。

なお詳しくは王毓銓、「明代的軍戸」(歴史研究一九五・八九)などの研究がある。

(15) 衛所自體については、制度的にこれを明確に區別する言葉は見あたらない。しかし、衛所の下部組織においては、例えば洪武十一年庚午朔の「置寧化守禦千戸所」のように特別に「守禦」を附して軍事的なものを意味しているものがある。

これに對してただ漠然と「軍民千戸所」とか、單に「千戸所」とだけあるものは恐らく性格の明瞭でない、どちらかと云えば收容所的な千戸所をさすものと思われる。ただし、これらは一應洪武時代に限つてあてはめうることであり、時代が下るとともに變つてくる點もあらうと思われるが、それについて今後の研究にゆずることとする。

(16) 國權 洪武二十二年四月甲寅

(17) 實錄 洪武二十五年八月丁卯

上以山西大同等處宜立軍衛屯田守禦、乃諭宋國公馮勝穎國公傅友德曰(以下略)この時の屯田のための衛所設立は、規模の大きいもので十六衛にのぼつた。

(18) 實錄 洪武五年七月己未

(19) 實錄 洪武二十六年三月乙卯

(20) 實錄 洪武二十七年三月癸亥

(21) 大同は、建文元年正月、廢代王(桂)爲庶人。幽于大同。(國權)のように南京政府の最も信賴していた衛所である。ただし註(17)でも明かなように屯田用として、洪武二十五年衛所が附加設立された。従つて、このころには多くの衛所が設置されていたが、各衛所がそれ／＼特色をもつていたと思われる。

(22) 實錄二十二年正月壬午、このときは會州城・富峪城・寬河城も同時に修拓したが、大寧城の規模は最も大きく、周圍三千六十丈、濠長三千百六十丈、深一丈九尺あり、周圍の如きは他の三城の合計より長い。また蓋倉廩四十七所をつくり、計五百五十間、營房計七千五百三十三間と記されている。これも大寧城が多くをしめていたであらう。

(23) 實錄洪武二十二年十二月甲寅、大寧に粟五斗を輸したものに淮浙鹽一引を給した。

(24) この記事は國權建文四年六月癸丑朔のものである。實錄にも同じ記事はあるが簡單であり、特に胡騎についてはふれていない。大敗の個所も、南京政府側の立場で書かれたために誇張されたものかいまは詳にしない。

## **Ordos in the T'ienhsün 天順 and Ch'enghua 成化 Eras of the Ming 明**

*Jitsuzô Tamura*

The article treats the following problems related to the defence of Ordos against the invasions of the Mongols during the T'ienhsün and Ch'enghua eras: first, the penetration during the Cheng t'ung 正統 and Chingt'ai 景泰 eras of the Mongols into Ordos with its geographical and historical background; secondly, activities of the two Mongol leaders, Bolai in the T'ienhsün era and Oroju in the Ch'enghua era; thirdly, Molikhai's invasion of North China and the construction of the Ordos Long Wall. Regarding the last point it is pointed out that the Ming built up a strong defence system under Wan Yüeh 王越 and Yü Tsu-chün 余子俊 with Yülin 榆林 as headquarters against the invasion of the Mongols under Molikhai, and the present Ordos Long Wall extending from Yülin to Humach'ieh 花馬池 was constructed by Yü Tsuchün who set up the colonial militia inside Ordos.

## **Mongolia in the Early Period of the Ming**

*Junpei Hagiwara*

With the fall of the Yüan 元 dynasty the Mongols in China fled to their homeland. Most of them did not resume nomadic life and lived in towns and villages, while the rest surrendered to the Ming and were allowed to return to China. The latter were mostly enlisted in the Ming army and had good treatment as the result of the Ming's appeasement policy toward the Mongols, but, when the Mongols ceased to be a menace, the Ming began to maltreat them, sometimes enforcing them become peasants. Their discontent led them to take part in Ch'engtsu's 成祖 rebellion. After Ch'engtsu's success they were rewarded with improving their status. Incidentally, the author refers to causes of the fall of the Yüan-Mongols, problems of returning from a nomadic to sedentary life, and the nature of garrison soldiers under the Ming.